

四一九 我が国は本宗教なき能わず。然れども徳川氏の興るに至るや、務めて此の学を唱えて、其の惑、幸にして甚しきに至らず。今の世に及びて洋学盛んに行われ、士大夫漸く学に務めざれば、則ち安くんぞ後來我が邦の宗門の乱、亦彼の西洋諸国の陋に似ざるを知らんや。是れ又吾の深慮するゆえんのものなり。 丑三月廿九日、録して書生に示す。

我國本不能無宗教然至徳川氏之興務唱此學而其惑幸不至甚及今世洋學盛行、士大夫漸不務學、則安知後來我邦宗門之亂、亦不似彼西洋諸國之陋一也、是又吾之所以深慮者也、 丑三月廿九日、録示書生

【訳】わが国は本来宗教がないということはない。しかし、徳川氏になって努めて儒学を唱えて、宗教上の混乱が大きくなるはならなかった。今の世になって、西洋の学問が盛んに行われるようになり、知識人がだんだん儒学を学ばないようになると、今後わが国の宗教上の混乱が西洋諸国の欠点に似てくることを知ることになるだろう。これもまた、私の深く憂慮せずにはおれないことだ。

四二〇 昔、晋の武帝、初め位に即き、嘗つて雉頭裘を殿前に焚き、以つて儉を示す。其の志を執る、亦以つて鋭と為すべし。

昔者晋武帝、初即位嘗焚雉頭裘於殿前、以示儉、其執志亦可以為鋭矣、

【訳】昔、晋の武帝が即位した当初、宮殿の前で雉頭裘（雉の頭の毛を織り込んだ高価な皮の衣）を燃やし、儉約が大切であることを臣下に示した。そういった信念を行動に表すことは、賢いやり方である。

四二一 当時、蜀は已に滅ぶといえども、江東未だ平らかならず、内外多事に於て、將に以つて厲精治を求め、而も国家の安きを図らんとするなり。

當時蜀雖已滅、而江東未平、内外多事、將以厲精求治、而圖國家之安也、

【訳】晋の武帝が皇位についたころ、蜀はすでに滅んだといっても、江東（揚子江下流南岸の地）はまだ平定されておらず、内政、外政ともまだ穏やかでなかった。今こそ、

力を尽くして世の中を治め、国家の平安を図ろうとするものであった。

四二二 既にして江東亦版に帰し、天下復た憂虞なし、是れより以来驕侈日に生じ、燕樂日に甚しく、頓に經國の遠謀を忘れ、而も自ら禍敗の漸く至るを覺らず。

既而江東亦歸版、天下無復憂虞、自是以來驕侈日生、燕樂日甚、頓忘經國之遠謀、而不自觉禍敗漸至也、

【訳】すでに江東地域が支配下に入り、世の中に憂いと恐れがなくなると、それ以降は日に日におごり贅沢心が増長し、宴席に興じることも多くなり、今までうってかわって国を経営する長期的な思慮を忘れ、禍や失敗が徐々に迫っていることも自覚できなくなるなった。

四二三 此れによりてこれを觀れば、則ち山濤のいわゆる「聖人にあらざるよりは、外、寧なれば必ず内憂あらん。呉をして以つて外の懼れと為す」もの。果して其等の爽わざるを見る。

由此觀之、則山濤所謂自非聖人、外寧必有内憂、釋吳以爲外懼者、果見其等之不爽矣、

【訳】この事から考えてみると、晋の武帝が呉を討とうとしたとき山濤が「聖人ならいざ知らず、凡人であれば外が治まってしまえば、必ず内から問題が起こってくる」と言ったことに当てはまる。果たして、その通りのことになったことが分かる。

四二四 孟子も亦言えるあり、曰く「憂患に生き、安樂に死す」と。聖賢の教、守らざるべからざるなり。有識の言、従わざるべからざるなり。

丑五月廿七日、録して書生に示す。

孟子亦有言、曰生於憂患、而死於安樂、聖賢之教、不可不守也、有識之言、不可不從也、丑五月廿七日、録示書生、

【訳】孟子もまた言っている。「憂患の時には、自らきびしく戒めるから、きびしい生き方になる。安楽の時には、かえってその戒めの心がなくなるから死という災いさえ招くものだ」と。聖賢の教えはきちんと従うべきである。

四二五 天地の性は、惟人を貴しと為す。而して人の道は、又心より大なるはなきなり。

天地之性、惟人爲貴、而人之道、又莫大於心也、

【訳】天地の本質は、ただ「人」を尊いものとする。そして人が正しく生きる道は「心」より大きなものはない。

四二六 心の、物たる、方円を以つて言うべからず、臭味を以つて説くべからず、大小高下を以つて論ずべからず。

心之爲物、不可以方圓言矣、不可以臭味説、不可以大小高下論矣、

【訳】心というものは、四角とか円いとか形をもって言うものではない。臭いとか味とかで説明するものではない。大きいとか小さいとか高いとか低いとかで論議するものでもない。

四二七 孺子の井に入るを見ては、怵惕惻隠し、嘽爾蹴爾の食を見ては、受けず、屑しとせず。是れ孟夫子の端的に指し出して、人に示すゆえんのものなり。

見孺子入井、而怵惕惻隠、見嘽爾蹴爾之食、而不受屑、是孟夫子之所以端的指出而示人者也、

【訳】幼児が井戸に落ちそうになっているのを見れば、誰でもハッと驚き、痛みあわれむ心を起こし助けようとする。また、叱りつけるようにして食べ物を与えるなら、どんなに餓えている人も受けないし、また足げりにするようにしてこれを与えるなら、乞食でさえもものをいさぎよしとしない。そんな心が誰でもあることを、孟子は分かりや

すく教えてくれている。

四二八 人、苟^{いやし}しくも此の説を以つて、反觀内省し、其の能く然るゆえんものを求めば、則ち戚戚焉^{せきせきえん}として蓋^{けだ}し自ら禁遏^{きんあつ}すべからざるものあらん。是に於いてかこれを識^しりこれを明らかにし、これを存しこれを養^{おのれ}えば、以つて己^{おのれ}を成すべく、以つて物を成すべく、以つて越天地^{こえてんち}に対して、愧^はづる所なかるべし。

六月七日、録して書生に示す。

人苟^{いやし}以^{もつ}此説、反觀内省、求^{もと}其所^{そのこ}以^{もつ}能然^{のうぜん}者、則戚々焉、蓋有^あ不可^{たが}自禁遏^{おのれをこ}者^{あり}矣、於^{おの}是平識^{へいし}之^を明^を之^を、存^を之^を養^を之^を、可^{たが}以^{もつ}成^を己^を、可^{たが}以^{もつ}成^を物^を、可^{たが}以^{もつ}對^を越天地^{こえてんち}、而無^あ所^な愧^を矣、六月七日、録示^を書生^に。

【訳】人は少なくとも孟子のこの教えによつて、深く自分を見つめ、その教えを自分のものにしようとすれば、自分の中にも他人のことを心配し他人を思いやる心を押さえることができないものがあることを知るだろう。そういうことわかれば、これを明らかにしていき、それを自分の中にますます成長させ、世間がそれによつて成り立っていることを知れば、全世界、宇宙に対しても自分を恥^はじめることはない。

四二九 予、年稍^{ややち}遲暮^{ちほ}に迫る。平生を回視し、慙愧^{ざんき}に勝^たえず。

予年稍^{ややち}迫^{ちほ}遲暮^{ちほ}、回^を視^を平生^を、不^た勝^を慙愧^を。

【訳】私もだんだん歳をとつてきた。日ごろのことをふり返ると、恥^はじ入るばかりだ。

四三〇 初め幼少より、私心汨没^{こつぼつ}に甘んぜず、年十八九に及び、出でて京師に遊び、師友の間に周旋す。進取の志、蓋^{けだ}し未^{いま}だつて一日も自ら^{みずか}廢弛^{はいし}せざるなり。

初自^{もと}幼少^を、私心不^た甘^を汨没^を、年及^を十八九、出遊^を京師^を、周^を旋^を於^を師友^を之間^を、進取^を之^を志^を、蓋^{けだ}し未^{いま}だつて一日も自ら^{みずか}廢弛^をせざるなり、蓋^{けだ}し未^{いま}嘗^た一日自^{もと}廢弛^を也。

【訳】幼少の頃から、世間に埋もれてしまうことに甘んじてはいなかった。十八、九になつて、田舎から京都に出て師や友人の訪ねて回っていた。自ら進んで物事に組み組む

姿勢は、いまだかつて一度たりともおろそかにしたことはない。

四三一 或いは古人を尚友^{しやうゆう}し、其の詩を誦し、其の書を読み、殆んど飢渴^{きかつ}の飲食に於けるがごとし。或いは経を講じ理を弁じ、参究^{さんきゆう}商訂^{しやうてい}す。研鑽^{けんざん}これ力^{つと}め、亦未^{いま}だつて一日も自ら荒怠^{みずか}せざるなり。

或尚^{しやう}友古人^{ゆうこじん}、誦^{じゆ}其詩^{きし}、讀^{じゆ}其書^{きしよ}、殆如^{さいじゆ}飢渴^{きかつ}之於^の飲食^{いんじき}、或講^{かう}經辨^{きんべん}理^り、参究^{さんきゆう}商訂^{しやうてい}、研鑽^{けんざん}之力^{のちから}、亦未^{いま}嘗^か一日^{いちにち}自^{より}荒怠^{みずか}也。

【訳】あるときは古人を友とし、その人の詩をそらんじ、その書を読み、ほとんど飢えと渇きで飲食を求めるように、求めていった。また、四書五経について論議し、道理を述べ深く研究し考えを深めていった。学問を深く研究することに力を入れ、それから未だかつて、一日も自ら投げやりにして怠けたりしたことはない。